

序

世界各国の先頭を切って高齢化が進行するわが国は、高齢者に対する社会の負担軽減を多角的に進める必要に迫られている。とりわけ、高齢者を非介護状態に保つ意義は大変大きいと考えられる。しかし、高齢者が医療行為を受けたことを機会に身体機能の低下をきたし、回復できずに長年経過することは稀ではない。医療の現場で疾病の治療に主眼がおかれることはある程度やむを得ない。しかし、疾病が治癒しても不可逆的な身体機能の低下が残存すれば、治療の価値は著しく損なわれる。医療従事者は、高齢社会の負担軽減のためにも、また自らの医療行為の価値を保つためにも、高齢患者の身体機能維持に注力すべきである。

入院患者に高い頻度で低栄養を認めることは以前から指摘されていた。若年者は、低栄養がもたらす体重減少、骨格筋量の減少、身体機能の低下から比較的容易に回復可能である。しかし、高齢者はその能力に欠如している。したがって高齢の入院患者には、低栄養を防止するためにより綿密な栄養管理計画の策定が必要であると言える。

わが国では「高齢者は野菜中心の食事を摂取すべき」「高齢者にとって肉や油は体に悪い」などの根拠のない考えが、ともすれば医療従事者にも浸透している。慢性腎臓病に代表される蛋白制限を必要とする疾病に罹患していない限り、高齢者に蛋白制限は必要ない。骨格筋量を維持するためには、むしろ若年者以上の蛋白質の摂取が必要である。

本書では、健常高齢者の生理や消化吸収能、栄養素代謝を解説いただいた。また、疾患に罹患した高齢者の治療について、栄養管理に言及しながら示していただいた。これまで本書のような“高齢者”に主眼をおいた栄養管理の書籍は存在しなかった。編者のわがまを快く聞いてくださった錚々たる執筆者の方々に心から御礼を申し上げ、序文としたい。

2013年1月

山中温泉医療センター センター長
大村 健二